

mediopos 30

2016.11.11 ~ 2016.12.5

【神秘学ポエジー～風遊戯 第65集】

media-poesie ヴァージョン

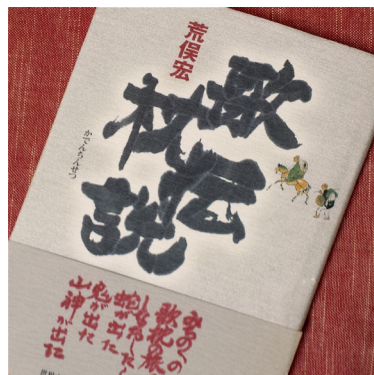
mediopos726-750

神秘学遊戯団

mediopos-726

2016.11.11

■荒俣宏『歌枕伝説』（世界文化社 1998.10）



「歌枕とは、ふしぎに想像力を刺激する、なんとも絶妙な用語だと思う。(…)

たとえていうのも気が引けるけれど、現代に照らしていえば、演歌のご当地ソングなどものが、歌枕の役割を引き継いでいるのではないか。どちらも「歌」である点が、さらにおもしろい。つまり、津軽、というだけでは印象が明瞭でないが、津軽海峡冬景色、となれば北国のわびさが眼前に浮かんでくる。函館、というよりも、函館の女、とすることで北海の波しづきまでが目に見えてくる。具体的な地名と、歌のイメージとが、強い相互作用を生じて、ご当地の劇的な印象を固定させる。

昔が和歌で、今が演歌だとすれば、歌枕を詠みこんだ和歌も、ご当地ソングそのものであるといえるだろう。(…)

日本には古来、あの『枕草子』を筆頭に、『草枕』『能因歌枕』といった書物のタイトル、さらには和歌を詠むに欠かせない「枕詞」に至るまで、揃いも揃って「まくら」なのである。

たとえば、草枕といえば野宿の意味であって、文字どおり「旅」を暗示する枕詞としても成立している。旅と和歌とは、ここでも分かちがたいのである。」

「まくらは、頭倉、目倉、真倉、真座、などの語かた転じて生まれたといい、また腕や袖を枕（ま）いて頭を支えながら野宿したことから、まくらを「枕座」の意味とも解釈する。いずれにしても、頭をのせるための座、あるいは倉を指すことは、まちがいないようだ。これが転じて、先についているもの、つねに用意されているもの、あるいは大切な部分を支えるものをあらわすことばとしても使われるようになった。

この枕の機能を、そのまま文学上の話に置きかえたとき、枕詞なる文章の修辞法が発生したのも当然といえる。これは文字どおり、あることばの枕となる「支え」のことばだからである。おそらく「歌枕」といういい方も「歌の枕詞」を短縮して成立したのだろう。「歌枕がなぜフィクションかといえば、これがそもそも土地柄の情報であって土地そのものの名称ではないからである。つまり土地を具体的に指すことばではなく、土地の「風（ふう）」をあらわしている。洋風・和風の風、あるいは風俗や風習の「風」とは、中国で方位の神に仕えたお遣いの神の名である。各地に特色や個性をもたらす役目がある。風を備えた土地は「風格」を得る。歌にうたわれるべき対象となる。だから「末の松山」とは、陸の先端にある松山をイメージさせる土地を指すだけのことであって、そういう土地が固有の場所としてあるのではないのだ。」

「歌枕は実在しない神世の世界につながる土地であるが、しかし文化やイメージの中では確実に存在する。ちょうど鳳凰や竜や麒麟や白澤といった中国の神獣たちが、実在しないのに中国文明の中ではリアルで日常的な存在だったことに、よく似ている。」

見えないものこそが
ほんとうに感じられるのは不思議だ

風に姿はないけれど
ときに強くときにやさしく
語りかけてくるように

歌を手にとることはできないけれど
ときに熱くときに悲しく
訴えかけてくるように

現では見えないけれど
夢のなかでは見えてくるものがあり
目には見えないけれど
心のなかでは見えてくるものがあり

水平を見ても見えないものが
垂直をみると見えてくるものがあり
実を見ても見えないものが
虚のなかでは見えてくるものがあり

正面を見ても見えないけれど
後ろの正面には見えるものがあり
私には見えないけれど
私ではない私には見えてくるものがあり

mediopos-727

2016.11.12

■富原眞弓『ムーミンを読む』（ちくま文庫 2014.1.10）

（『『ムーミン谷の十一月』ムーミンたちを待つトフト』より）

『最後のムーミン物語『ムーミン谷の十一月』では、ムーミンたちの不在が語られる。『ムーミンババ海へいく』でみたように、フィンランド湾沖の小さな島で、それぞれのアイデンティティを求めて奮闘中なのだ。にもかかわらず、谷をおとずれる客たちのかなりいいかげんな記憶のなかで、たえず「不在の家族」という表象によって、いわば脚色され反転されたネガとして、奇妙にあざやかな存在感を放っている。

ムーミンたちのいないムーミン谷に、ヘムルだのフィリフヨンカだのトフトだのスクルトおじさんだのと、さまざまな悩みをかかえた訪問者がつぎつぎとやってきて、自分さがしの物語をくりひろげる。そして、「ほんとうの自分」を見つけるお手本となるのが、めいめいの思いこみによって理想化されたムーミンたちというわけだ。そこへ妹のミイの顔をみにきたミムラと、べつの理由から谷にもどってきたスナフキンが加わり、ちぐはぐとなりあわせの六人の共同生活が始まる。」

「いてもじゃまにならず、いないときさびしい。いるはずだと安心していると、ふいに足もとをすくわれる。これがムーミンたちである。こういう存在はめったにない。不在ゆえにいきばりになる存在感には、一抹のさびしさがつきまとう。わたしたち読者が、この作品を最後のムーミン物語だと知っているせいなのか。あるいは、子ども時代げの幕引きを考えている作者の決意が、すけてみえるせいなのか。

かつてヤンソンはこう語った。「説得力のある児童文学は、象徴や自己同一視や自己執着にあふれている」。じつさい、ヤンソンはさまざまな生きものに自分を重ねる。たいていは主人公のムーミントロールに、ときにはムーミンババ（自伝作家にして劇作家）、に、ときにはスナフキン（詩人にして音楽家）に、そしてまれにミイ（トリックスター）にも。

注目すべきは、この自己同一視のリストにムーミンママ（画家）がふくまれていないことだ。ママはどこまでママである。ムーミントロールが無条件の愛と信頼を寄せる相手、その愛と信頼をしっかりと受けとめてくれる存在。それが（おそらくは美化された）ムーミンママなのである。

一方、主人公ムーミントロールの影はかぎりなくすい。ムーミンたちの留守宅をおとずれた六人のだれひとり、ムーミントロールをなつかしむものはいない。ヘムルはムーミンババに、フィリフヨンカとトフトはムーミンママに、ミムラはミイに会いにやってきた。さすがにスナフキンは、友だちのムーミントロールを一瞬だけ思い出すが、さっさと忘れてしまう。なにかに、だれかに、入れこむことはないからだ。」



いるとき

いない

いてほしいとき

いない

いないとき

いる

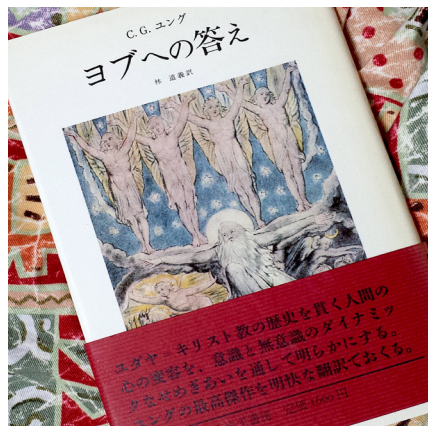
いないから

いる

mediopos-728

2016.11.13

■C.G.ユング『ヨブへの答え』（みずさ書房 1988.3）



「打ち倒され、迫害された者が勝利するのは当然である。なぜならヨブはヤーヴェより道徳的に上立ったからである。この点では被造物が創造主を追い越していたのである。外的な出来事が無意識の知に触れるときにはいつでもそうであるが、無意識の知が意識化されることがある。〔その場合には〕その出来事は《既視》のものとして認識され、それについて予め存在していた知が思い起こされる。この種のことがヤーヴェに起こったに違いない。ヨブの優位はもはや覆すことのできないものである。その優位によって今や熟慮や反省を本当に必要とする状況が生まれた。それだからこそソフィアが手を貸すのである。彼女は必要な自覚を援助し、それによってヤーヴェが自ら人間になろうとする決断を可能にする。こうして重大な結果をもたらす決断がなされる。つまり彼は以前の幼稚な意識状態を越えて高まるのである。なぜなら彼は人間ヨブが彼より道徳的に優れていることを、それゆえ彼が人間の状態にまで追いつかなければならないことを、間接的に認めているからである。もし彼がこの決断をしないなら、それは彼の全知と明らかに矛盾することになる。ヤーヴェは人間にならなければならない。なぜなら彼は人間に不正をなしたからである。義の番人である彼はいかなる不正も償わなければならないことを知っており、また知恵は道徳律が彼をも支配することを知っている。彼の被造物が彼を追い越したからこそ、彼は生まれ変わらなければならないのである。」

「個性化過程が無意識のうちに進む自然なものであるか、意識的になされるものであるかでは、驚くほどの違いがある。前者の場合には意識はまったく関与しない。それゆえその始まりも終わりも曖昧なままである。それに対して後者の場合は、多くの曖昧なものが光に照らされるので、一方では人格が解き明かされ、他方では意識が不可避免的に広がり洞察を獲得する。意識と無意識との対決は、闇を照らす光が闇によって理解されるばかりでなく、闇をも理解するという形でなされなければならない。《太陽と月の息子》は、対立物が結び合わされることの、シンボルでもあり可能性でもある。彼はその過程のアルファでありオメガであり、また中間者であり仲介者である。《彼は無数の名を持つ》と錬金術師はのべているが、それは、個性化が発した元であり、またそれが目指していく目標でもあるものが、名前を持たない《名状しがたいもの》であることを暗示しているのである。」

無意識が私を襲う！

理解できないままに
幾度も幾度も苦しみに耐え
ただ祈り続けるしかない

けれどもその祈りは
無意識という闇の神が
みずからに与える光となるだろう

神は人となり
みずからを供犠として
あらたな光となるだろう

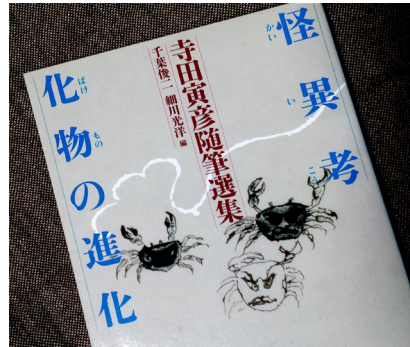
新たな意識が私を照らす！

闇は光に照らされ
闇は光を理解し
光は闇を理解し結ばれるだろう

mediopos-729

2016.11.14

■寺田寅彦『怪異考／化物の進化（寺田寅彦随筆選集／千葉俊二・細川光洋 編）』（中公文庫 2012.8）



「人間文化の進歩の道程において発明され創作されたいろいろの作品の中でも「化物」などは最も優れた傑作と云わなければならぬ。化物もやはり人間と自然の接触から生まれた正嫡子であって、その出入りする世界は一面には宗教の世界であり、また一面には科学の世界である。同時にまた芸術の世界である。

いかなる宗教でもその教典の中に「化物」の活躍しないものはあるまい。化物なしにはおそらく宗教なるものが成立しないであろう。もっとも時代の推移に応じて化物の表象は変化するであろうが、その心的内容においては永久に同一であるべきだと思われる。」

「化物がないと思うのはかえって本当の迷信である。宇宙は永久に怪異に充ちている。あらゆる科学の書物は百鬼夜行絵巻物である。それを繙いてその怪異に戦慄する心持がなくなれば、もう科学は死んでしまうのである。

私は時々密かに想うことがある。今の世に最も多く神秘の世界に出入りするものは世間からは物質化学者と呼ばれる科学研究者ではあるまいか。神秘なあらゆるものは宗教の領域を去っていつの間にか科学の国に移ってしまったのではあるまいか。

またこんな事を考える。科学教育はやはり昔の化物教育のごとくすべきものではないか。法律の条文を暗記させるように教え込むべきものではなくて、自然の不思議への憧憬を吹き込むことが第一義ではあるまいか。これには教育者自身が常にこの不思議を体験している事が必要である。既得の知識を繰返して受売りするだけでは不十分である。宗教的体験の少ない宗教家の教説で聴衆の中の宗教家を呼びさますことは稀であるのと同じようなものであるまいか。」

世界は深き森である
森には化物が棲んでいる

歩む道を外れると
そこは怪異に充ちている

化物などいない！というのは
無知ゆえの強がりすぎない

光を求めるときには
闇をも求めていることになる

わかる！ということは
わからぬ！を増やすということだから

人が進めば
化物はもっと先に進んでゆく

森に分け入れれば分け入るほどに
怪異の魔物は跋扈してゆく

ところで人も深き森である
森には化物が棲んでいる・・・

mediopos-730

2016.11.15

■白川静『孔子伝』（中公文庫 1991.2）



「孔子の教団に属する人々は、儒とよばれた。孔子自身も、かつて弟子の子夏に、「汝、君子の儒となれ。小人の儒となること勿れ」と教えたことがある。儒に君子と小人の儒とを区別するのは不審なことのようであるが、これはおそらく理由のあることであろう。儒にも種々の階層があったらしいのである。」

「儒はもと巫祝を意味する語であった。かれらは古い呪的な儀礼や、喪葬などのことに従う下層の人たちであった。孔子はおそらくその階層に生まれた人であろう。しかし無類の好学の人であった孔子は、そのような儀礼の本来の意味を求めて、古典を学んだ。『書』や『詩』を学び、これを伝承する史や師についても、ひろく知見を求めた。そしておよそ先王の礼学として伝えられるすべてのものを、ほとんど修め尽くすことができた。儒学のもと知識的な面は、これですでに用意を終えているのである。これをどのように現実の社会に適用してゆくか。それが次の問題であった。この時代にはすでにかなり一般的なことであったが、孔子も弟子をもった。政治的にも発言しうる立場にあり、知識社会への影響力も決して微弱ではない。しかしそのような教団は、当時必ずしもなかったとはいえないし、またそれだけでは十分な意味で君子の儒ではない。

顧みていえば、それらの知識や徳目や教科は、それぞれの職能者たちの伝承として、すでにあったものである。問題はこれらの意識形態をどのように統一し、その全体に連関を与え、具体化し、有機的に機能させるか、すなわち伝統として樹立するか、ということである。そこに孔子の課題があった。」

「儒教は、中国における古代的な意識形態のすべてを含んで、その上に成立した。伝統は過去のすべてを包み、しかも新しい歴史の可能性を生み出す場であるから、それはいわば多の統一の上になり立つ。儒の源流として考えられる古代的な伝承は、まことに雑多である。その精神的な系譜は、おそらくこの民俗の、過去の体験すべてに通じていよう。孔子は、このような諸伝承のもつ意味を、その極限にまで追求しようとした。詩において、楽において、また礼において、その追求が試みられたことは、すでにみえてきた通りである。そしてその統一の場として、仁を見出したのである。過去のあらゆる精神的な遺産は、ここにおいて規範的なものにまで高められる。しかも孔子は、そのすべてを伝統の創始者としての周公に帰した。そして孔子自身は、みずから「述べて作らざる」と規定する。孔子は、そのような伝統の価値体系である「文」の、祖述者たることに甘んじようとする。しかし実は、このように無主体的な主体の自覚のうちにこそ、創造の秘密があったのである。伝統は運動をもつものでなければならない。運動は原点への回帰を通じて、その歴史的可能性を確かめる。その回帰と創造の限りのない運動の上に、伝統は生きてゆくのである。」

儒は鬼神を語らぬという
みずからが鬼神とともにある者だったから
だ
儒は鬼神から離れることによって
人の道を歩む必要があったのだ

古い見る者は
新しい見る者にならねばならない
古い見る者は鬼神を事とする
新しい見る者は
みずからの内に自在を得ようとする

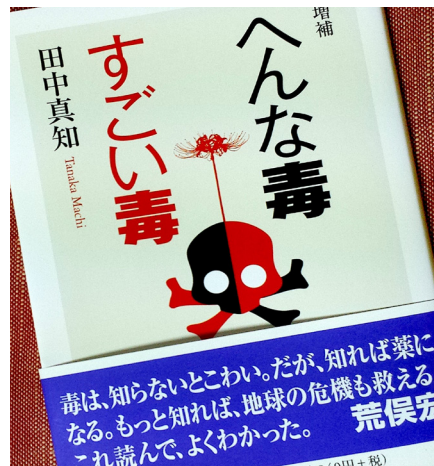
伝統は過去のすべてを含む
けれどもそれは過去への回帰ではない
過去に叡智を求めるものは転びやすい
形式化した過去はすでに死んでいるからだ
原点への回帰はすでに創造を含んでいる
新たな仕方で新たな創造を事としなければ
ならない

今こそ鬼神を語らねばならない
鬼神に従う者でなくなった今こそ
鬼神を避けることはすでに過去となった
過去の鬼神はすでに新たな姿で現れている
新しい見る者は新しい宇宙を生きる

mediopos-731

2016.11.16

■田中真知『へんな毒 すごい毒』（ちくま文庫 2016.11）



（「文庫版あとがき」より）

「青カビから発見された最初の抗生物質のペニシリンは、その劇的な効果で第二次世界大戦中に多くの負傷者を救った。しかし「20世紀最大の発明」ともいわれたペニシリンも、使用されるようになってから数年後には耐性菌が発見された。その後、新たな抗生物質が次々と発見されたが、たいてい数年以内に耐性菌が登場している。

最近の中には数十分で世代交代をくりかえすものものいる。世代交代に30年くらいかかってしまう人間にくらべたら、そのスピードは光速さながらである。耐性菌を生み出す変異のスピードに勝つことは絶望的ともいえる。にもかかわらず、いまや抗生物質は世界中に大量に出回っており、発展途上国では処方箋なしに買えるところも少なくない。

抗生物質は医療現場だけではなく、畜産や養殖の現場でも使われている。過密状態で病気の発生しやすい畜舎や養殖池では、あらかじめ飼料に抗生物質を添加することで病気の発生を防いでいる。しかし、それは医療現場で起きているように、菌類の耐性の獲得を促すことになる。（・・・）

強力な毒の大量使用が、さらに危険で強力な耐性菌を生む。その悪循環は結果的に、菌類や昆虫、植物や動物などのバランスのとれた共存関係をこわし、現在、年間四万種ともいわれる地球上の生物種の絶滅を加速する一員にもなっている。生物は共進化するという観点からすれば、望ましいのは菌類の薬剤への抵抗性を促進しない方法である。だが、そんなことが可能なのだろうか。

進化生物学者のポール・イーワルドは、それが可能であるという。」

「大量の抗生物質で病原菌をたたいて、かえってもっと危険な耐性菌をつくらせるのではなく、病原菌の毒性を弱める方向へと菌を進化させる。そうした環境を人間がとるのえてやればよいのではないかとイーワルドは述べる。人間が元気でないと病原菌も生きられないとなれば、いやおうなく病原菌の毒性は弱まる。人間と共存できるほどにまでその毒性が弱まれば、もはやそこに脅威はない。もちろん、それが可能なのは一部の病原菌に限られるだろう。しかし、同じ共進化でも、より強力な毒の開発という軍拡競争にむかうのではなく、毒を飼い慣らして、他の生物との共存の道を探っていくことこそ、テクノロジーという強大な毒を手にした人間が、いま、とらなくてはならない道なのではないだろうか。」

毒と薬は裏表

毒が薬に薬が毒に

毒と薬は使しよう

悪と善とは裏表

悪が善に善が悪に

悪と善とは使しよう

目には目を 歯には歯を

目も歯もときに歯止めなく

制そうとすればするほどに

毒は毒を深め

正そうとすればするほどに

悪は悪を深め

張りすぎた弦も

緩めすぎた弦も

美しく響かないように

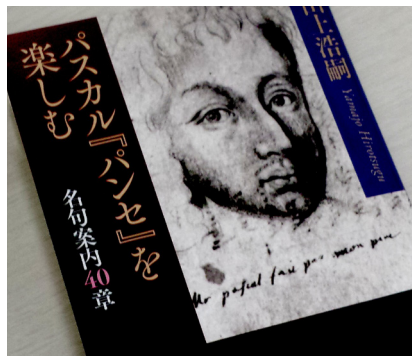
毒も薬も中ほどに

悪と善とも中ほどに

mediopos-732

2016.11.17

■山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ／名句案内 40 章』（講談社学術文庫 2016.11）



「次は、ミシェル・フーコーが『狂気の歴史』（一九六一年）の序文で引用して注目を浴びた断章である。

人間はあまりにも必然的に馬鹿なので、馬鹿でないことも、馬鹿の別のあり方からすれば馬鹿なのである。

(・・・)

パスカルは、「どんなにまともな人でも馬鹿からすると馬鹿に見える」と言いたいのだろうか。それとも、「どんなにまともに見える人でもやはり馬鹿でしかない」と言いたいのだろうか。つまり、パスカルは人間のなかに、「馬鹿でない」あり方、完全に正しい存在を認めているのだろうか。それとも、人間はあまねく馬鹿であると結論づけているのだろうか。

――私は後者だと思う。

(・・・)

冒頭の断章は、人間において「馬鹿でない」あり方、すなわち完全に公正で誤りのない判断がありうるということ表明しているのではなく、人間のなかに誰から見てもまともな存在など皆無である以上、自分こそがまともだという判断こそが愚かであるということを伝えていると解釈できるだろう。要するにパスカルは、人間にあまねく見られるうぬぼれを戒めているのである。

ところで、この世の誰もが多かれ少なかれ馬鹿であるという指摘は。一見するとニヒリズムの表明にほかならないが、どこか人を癒すところがあるようにも思われないだろうか。この世に絶対的に公正な判断基準が存在しないとき、私がさまざまな社会的基準に不適合であったとしても、多数者の意見にどうしても合意できなかったとしても、必ずしも私が誤っているわけではないと信じる可能性が残されるからだ。冒頭の断章は、強者の傲慢を挫くとともに、弱者を絶望から救う力をもっている。」

利口者は馬鹿に見える
馬鹿者以上に馬鹿に見える

利口と馬鹿の差はたかが知れているのに
利口者は利口を誇ったりもするからだ

議論に勝ち誇った顔を見ればよくわかる
牡蠣が鼻たれを笑うとはよくいったものだ

少数派が多数派を批判することもあるが
少数派も派である以上馬鹿の群れであることに違いはない

人を馬鹿にするよりは
自分を馬鹿にするほうがどこか賢者に見える

けれどもそれで自分の馬鹿がなくなるわけではない
馬鹿さ加減が少しだけ笑いに救われるだけなのだ

それでもその笑いはどこか馬鹿を癒してくれる
自分の馬鹿を見つめることはどこか祈りに近いからだ

mediopos-733

2016.11.18

■保坂和志『試行錯誤に漂う』（みすず書房 2016.10）



「表現や演奏が実行される前に、まずその人がいる。その人は体を持って存在し、その体は向き不向きによっていろいろな表現の形式の試行錯誤の厚みに向かって開かれている。「これがいい演奏だ」「これがいい文章だ」と言われて、自分の体がすでに知っている（というのは、うすうす気づいている）試行錯誤の厚みに関心を持たずに、既成の形に自分を従わせたら、模倣や縮小再生産しか生まれず、教育というのは本質的にそういうものでしかないが、「これがいい演奏だ」「これがいい文章だ」と言われても、自分の体がすでに知っている試行錯誤の厚みに忠実であろうとしたら、既成の形との軋みが起こる。

それが弦の上を指がこすれる音だ、というのはあまりにベタな比喻だが、表現というときに私がいつもそこに立ち返るのは事実であり、これがこういうことを考えるイメージの源泉とか起源になった。

人は、作品、演奏、表現されたものという、完成、ということを考える。雑に言えば、完成形が百点満点で、この作品は八十点ぐらい、こっちは六十点ぐらいという考え方をする。しかし、表現することにおいて完成はない。「どこまでいっても完成しない」ということでなく、完成という考え方は、出来事や行為を結果から考える考え方ののだが、出来事や行為には現在という時点から前に向かうプロセスしかない。あるのはプロセスだけで、完成やそれに類する言葉でイメージされる運動がそこに終わる状態がない。

ひたすら無限に伸びてゆく線みたいなものだが、線が伸びるという運動のプロセスだけがあるとしたら、無限、という言葉さえ消えるのではないか。「そんなことを知っている必要はない」という意味だと、とりあえずはしておくこともできるかもしれないが、表現することを試行錯誤ということから徹底して考えたとき、作品が完成するというイメージが生まれってきた言葉にはしばらくは敏感になっている必要がある。」

世界も
そして人も
完成しているわけじゃない

作品というど
完成されたもの
というイメージがあるから
それにどこか作者の特権のような
自我病も感じてしまうから
天の邪鬼なぼくは好きになれないな

表現するという
試行錯誤そのものに
むしろ思い入れが
ありすぎるのかもしれないけれど
そしてプロセスという思考錯誤そのものに
畏敬を持ちすぎているのかもしれないけれど

そういうものだ
が好きになれなかったり
教えることはほんとうはできない
としか思えないというのは
表現の既製品はすでに死んでいるからだ

創り出すプロセスも
受容するプロセスも
それが生きているときには
表現プロセスであることに違いはない
生きた思考と死んだ思考の違いもそこにある

mediopos-734

2016.11.19

■久米あつみ『ことばと思索／森有正再読』（教文館 2012.5）



「ものについて森が書きとめたいくつもの文章を拾ってみると、ものと表現の関係はおよそ次の過程を辿るようである。それは同時に思想の形成の過程でもある。

- 第一段階 ものと触れる
- 第二段階 ものが自分の中に入って来る
- 第三段階 自分がものになる
- 第四段階 思想の形成」

「[経験]が森のキー・ワードのひとつであることは誰も認めるところであろう。しかしその内実はどうと、捉えがたいところがある。著者自身「僕にとって大切なのは妙な言い方をすると、経験がどのようなものなのか、ということの経験である」となぞめいた言い方をしている。また、それはいわゆる経験主義ではなく、戦争体験とか極限体験とかいった、いわゆる体験とは一戦を画すものだと言っている。(…)ただ「体験」を指して森は「自分の道具として使用できるもの」、これに対して経験は「自分自身を定義するものとして他人と自分とに現れてくるもの、自分ということそのものがそれによって明らかにされるもの」と言い、別の箇所では「なにかがすでに生まれて来ていて、自分と分かちがたく成長し」「自分というものを本当に定義する」のが経験だ、と言っていることから、二者の区別は一応なされていると言えよう。」

体験と経験は
ものという境を隔てている

体験はものとふれる機会にはなるが
ものが自分の中に入って来ることはない
まして自分がものになることはない

体験を重ねても経験にはならない
量が質を変えられないように
道具が自分そのものにはならないように

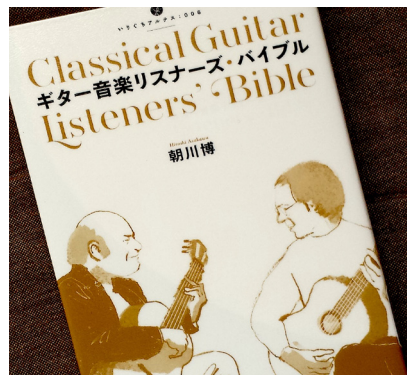
体験はなることだ
まだどこにもないじぶんに
けれど本来の姿へと歩む自分に

ほんとうに考えるということは
死んだ考えにこだわらずゆくことだ
いつも境を超えてゆくことだ
ものとなって考えることだ

mediopos-735

2016.11.20

■朝川博『ギター音楽リスナーズ・バイブル』（いりぐちアルテス6／アルテスパブリッシング 2016.8）



「武満徹の作曲家としてのデビュー作はピアノ曲の＜2つのレント＞(50)といわれる。以来、＜遮られない休息Ⅰ～Ⅲ＞、＜ピアノ・ディスタンス＞(61)、＜フォー・アウェイ＞(73)、＜閉じた眼＞(79)、＜雨の樹素描Ⅱ＞(92) 他のお話作を発表しているが、オーケストラに比べて作品の数は決して多いとはいえない。ピアノ曲以外の器楽作品としては、7曲ある独奏曲も含めて、やはりギター作品の多さが目立つ。

武満が初めてギター独奏曲を書いたのは1974年で、荘村清志が委嘱した＜フォリオス＞である。60年代に室内楽、管弦楽、映画などさまざまなシーンでギターを使ってきた後の、満を持してのギター独奏曲だったに違いない。その作品はブリテンの＜ノクターナル＞などとともに、第二次世界大戦後の現代音楽の世界にギターの金字塔を打ち立てることとなった。70年代に入って武満の作風に返歌が見られ始めた頃の曲で、自ら次のように語っている。「＜フォリオス＞は初めてのギター曲で、ギターに調性のシステムを使うのは冒険的な試みでしたが、あの場合トナリティーを使うのは良かったと思います」(『音楽の友』84年3月号／バルエコとの対談)。

＜フォリオス＞の後も、＜すべては薄明のなかで＞(87)、＜エキノクス＞(93)、＜森のなかで＞(95)などの名曲をギターのために書き続けたが、前述のバルエコとの対談のなかで、トナリティーに関して次のように語っているのが興味深い。――「＜フォリオス＞の後には、オーケストラ曲にもためらわずにトナリティーを使えるようになりました」。

傑出したオーケストラ作曲家といわれた武満徹にとって、ギターは小さなオーケストラ。だったのかもしれない……。『《夢の縁へ》はギター協奏曲、《虹へ向かって、バルマ》はギターとオーボエ・ダモーレを独奏楽器とした二重協奏曲と呼べるような作品だが、ともにギターのデリケートな音をオーケストラにどのように対峙させるのが課題となる。《夢の縁へ》ではオーケストラの豊かな響きのなかに持続音のないギターが緊張感のある鋭い音で切り込み、《虹へ向かって、バルマ》では、ふくよかなオーケストラの流れにオーボエ・ダモーレとギターが甘く溶けこむ。それぞれ異なる魅惑的な音の世界を作り出した。』

ギターの響きは
どこからやってきたのだろう

折りたたまれた源から
その響きは開かれる

すべては薄明のなかで
森のなかで
夢の縁へ

やがてその響きは
虹へ向かって
交響してゆくだろう

そしてまた
源へと折りたたまれ
帰還してゆきながら

mediopos-736

2016.11.21

■シュタイナー『神々との出会い』（高橋巖訳 シュタイナーコレクション4／筑摩書房 2003.12）

「ヨーロッパの芸術と精神生活との出発点に、二人の形姿が立っています。この二人は、近代の精神生活を霊的に把握する上でも深い意味を持ちうるほどに偉大な霊的衝動を、象徴的に表しています。現代の精神生活の本質を語っている二人なのです。すなわち、ペルセポネとイピゲネイアの二人です。この二人の名は、私たち近代人の二つの魂を示しています。そして近代人の最も深刻な魂の試練は、この二つの魂をどう統合するか、ということなのです。」

「ペルセポネが古い見霊文化の導き手であるとしたら、イピゲネイアは、私たちの外的な知性に深い宗教性を与えるべき、絶えることのない供犠の代表者なのです。」

供犠の伝統は、古代ギリシアから現代の最も新しい時代に到るまで、ヨーロッパ文化生活の流れの中で、常に生き続けてきました。ソクラテスが初めて純粹な科学的思考を古代統一文化から取り出したあの時代以来、常に生き続けてきたのです。」

「イピゲネイアがアガメムノンの娘であるように、ペルセポネはデメテルの娘なのです。アガメムノンは、実践の場において広範囲に知性を育成した古代ギリシアの英雄たちの一人です。一方、女神デメテルは最大の自然の奇蹟である、人間の感情と思考と意志の根源的な形姿です。その形姿は、人間の脳が人体全体からまだ別れていなかった時代を指示しています。その形姿はまだ、外的な素材を養分として摂取することと、脳という道具を使って思考することが、まだ分離していなかった時代をも指示しています。当時の人間は、作物が畑で稔るとき、心の思いが外に生きているように感じました。実際、希望という思いが畑の上に拡がり、ヒバリの歌のように、自然の奇蹟の働きに浸透している、と感じました。精神生活が物質生活と一つであるとき、心の思いと人体とは一つになって原母という霊的形姿となって現れます。そしてペルセポネは、この原母から人間の姿で生まれたのです。」

「一体ペルセポネはどこへ行ったのでしょうか。」

「このペルセポネの力は、人間の魂の冥界へ降りていき、そして人間の魂の深みで安らいでいたものに抱きつかれ、いわば人間の魂の深みに引きずり込まれました。そのようにして、人類史の生成過程で、ペルセポネの略奪が、人間の魂の深部に潜む力によって遂行されました。人類に魂のこの力は、外の自然界では、プルートーに代表される力です。」

プルートーは、ギリシア神話の意味では、地球の地下を支配しています。しかし、ギリシア人は、地球の深部に働くこの同じ力が人間の魂の深部にも働いていることを知っていました。ペルセポネがプルートーに奪われたように、人類の進化過程で、古い見霊能力が、プルートーによって、人間自身の内部で奪い取られたのです。」

「太古の人間は食べ、呼吸し、そうすることで、偉大なデメテルを体験しました。大気の中で働き、植物の中に人間が摂取すべき力を送り込んだのは、デメテルなのです。けれども人間に見霊能力を授けたのも、同じデメテルでした。この女神はそうすることで、人生をどのような態度で生きればよいのかを人間に分かさせたのです。」

「当時は、後世の意味での掟（法）はありませんでした。外から下される命令はなく、人間は見霊能力を用いて、なすべきことを、何が正義で、何が善なのかを、知ったのです。ですから、太古の人間は、養分を与えてくれるデメテルの中に、宇宙の力、自然の力を見ていましたが、この力は、人間に養分を摂取させることで人間の能力を作り変え、人倫、道德の規準を受け容れさせたのです。」

「その後生じた古代の「秘儀」とは、何を意味するものだったのでしょうか。デメテルは、人間本性の中に、娘ペルセポネがいなくなったことを知りました。彼女はより凝縮した身体の中に奪い取られたのです。そして今、この見霊能力が身体の粗野な養分摂取のために奉仕させられています。この事態に直面したデメテルは、太古のあの直接的な道德的立法者の立場から身を引きました。そして女神はその代わりに何をされたのでしょうか。女神は秘儀を創始したのです。そして秘儀を通して、自然力による古い立法の代わりにするものを人間に与えたのです。」

「人間は自然から疎外されてしまったので、より抽象的で、より知的な道德律を必要とするようになったのです。」



かつて
心と体はひとつだった
人のなかには
デメテルの娘ペルセポネがいた

けれど
やがて人は変わり
ペルセポネは
無意識の深みへ幽閉されてしまった

そうして人は
自然から切り離され
自分からさえも
切り離されてしまった

ペルセポネの声が聞こえなくなり
それは秘儀によって
与えられるものになってしまった

今や新しい秘儀が必要となった
幽閉されたペルセポネを解放し
イピゲネイアとともにあることだ

かつては自然のなかにみずからを見出したが
いまや自由な認識によって
自然のなかに叡智を
そしてみずからを見出さねばならない

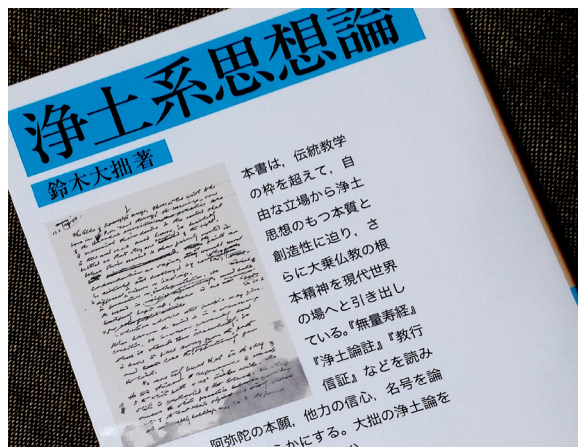
切り離されてしまった
自己認識と自然認識に
橋を架けなければならないのだ

与えられる道德の檻のなかで過ごすのではなく
みずからの叡智のなかに
自由そのものを見出すことで

mediopos-737

2016.11.22

■鈴木大拙『浄土系思想論』（岩波文庫 2016.7）



「有為転変とか諸行無常とかいうことから解放せられて、何か無為常住のものを求めんとするのが、印度民族の精神的努力であった。それで、仏教者も生死の繫縛から離れて涅槃を獲得したいとつとめた。生死というのが果たしてあるのか、あればそれは何だろうか。どこから来てどこへ行くのか。「どこ？」とは何の義か。また生まれ来たり死んで行くというものがあるのか。あればそれは何物か。「どこ？」と云う時、浄土が考えられ、「何物？」と云う時、霊とか、個我（アートマン）とか、人（プトガラ）とかいうものが考えられた。併し仏教では無我を説くのであるから、何か生死するというものはないのである。随って生死そのことも無意味とならなくてはならぬ。個我の観念が無意義であれば、生きて来て、死んで行くと言すべきものは、一つの幻影、即ち迷える意識の上の沙汰であろう。『浄土論』の著述たる天親菩薩は、浄土に生まれんと願うと云うが、そんな願を起す主体は何か、「生まれたい」と云っても生まれるものがないではないか。願生は一つの迷妄にすぎぬと云える。」

「願生と云えば、とにかく、何かの意味で願者がなくてはならぬ。その願者なるものは因縁所生で仮名の人は云うまでもない。併し仮名と云うは、空虚のところに幻影をすえたということではなく、因縁所生で本来空ではあるが、因縁そのものは認めねばならぬ。即ち心念の動きに前後の相続性と同一性を認めざるを得ぬ。これが認められなければ吾等の思索は全然不可能になる。それ故、因とか果とか、前とか後とか、仮とか真とかいうことが話せられる限り、仮名の人もまたただの仮名ではない、幾らの仮ならざるものを持たねばならぬ。浄土も穢土も、仮名の人を容れている限り、また仮名たらざるを得ざるは言を俟たぬ。併し仮名と云うには何かそこに仮名ならぬものなくてはならぬ。生死と云い、人と云い、刹土と云うこと。何れも虚仮ではあるが、そう云うのは、そうでない何かを明らかに見ていなくてはならぬ。それが見られると、さきの仮名が仮名でなくなる。浄土と穢土と、浄土の人と穢土の人とを対立させている間は、何れも仮名であるが、淨穢が淨穢でない立場が見つかる時、仮はそのままで真となる。この立場が不一不異のところである。これを一異観と云うのである。また即非の論理と云うのである。」

他力はむずかしい
他力の力を得るには
自力をなくさねばならないからだ
自そのものをなくさねばならないからだ
ではそのときだれが力を求めるのだろう
いったい何物が願を持つのだろう

名号が名号を
祈りが祈りを
仏が仏を求めるのだ
そのとき他力は他力ではない
自力でも他力でもない
働きそのものしかない絶対力

そのとき
自力も他力もなく
我も他もなく
仮も真もなく
因も果もなく
浄土も穢土もなく
生まれるものも死せるものもない
ただそこに絶対力の働きだけが充ちている
一切は空なのだ

mediopos-738

2016.11.23

■田中優子『江戸の音』（河出文庫 1997.9）



〔第三章 《対論＝武満徹》江戸音曲の広がり〕より）

「武満——日本の音楽で、ことに他の国にない音楽の享受の仕方、ユニークな態度というのは、爪弾きや口ずさむというものももちろんそうなんですが、それと同じように、遠音（とおね）を楽しむということがあるんです。遠音がいちばん綺麗だという考え方があつたわけ。たとえば尺八などはなるべく遠音がいい、遠音を聴く、ということがあつたわけ。それから木遣なども遠音がいちばん美しいとされている。

それでは遠音というのは、実際に物理的にどうなのかというと、遠くでやっている音でしょう。すると、近くでやっている音と何が違うのかということなんですが、そこでいちばん面白いのは、遠音の場合には、弱い音とか強い音という、いわゆる西洋音楽にとって非常に大事なダイナミック、フォルテとかピアノとかいうのは、ほとんど意味をなさない。つまり、そこから聞こえてくるのは音色だけなんです。木遣なんかの遠音というのは、集団で歌うわけですから、集団で歌っている木遣を遠くから聴くということではほとんど固有の音楽ではなくなる。遠音になると、他の雑音と混じってしまう。他の雑音とほとんど同じように楽しむという享受の仕方がある。そうした態度が、ある時期、ことに江戸時代に成立したのではないかと。表層に出て来ているかどうかは別として、江戸音曲をつくった背後にはそうしたことがあるのじゃないか。（・・・）

それから、サワリということについていえば、三味線におけるサワリということは、寛政年間あたりでうるさくいわれたわけですね。ところが能などでも、能管などは、わざわざ一本一本調律を狂わせて吹奏する。雅楽で使われている竈笛に、竹の舌のようなものをいれて、一本一本笛の調子を狂わせてしまう。それによって、あの気魄のある音をつくりだす、

それはずいぶん昔から、かなり意図的にそういう仕掛けをつくっていく。サワリというのは「障」ですから、そうした障害装置をつくって、それがあつたことで逆に自己に限定されないで済む。これは僕はなかなか面白いのではないかなと思うんです。

田中——始めと終わりということについても不思議に思うことがよくあつた。始めと終わりがないんです。

武満——まったくないんです。

（・・・）

武満——僕自身は音楽を始めた頃は、なにしろ日本的なものは一切全否定ということでしたから、ことに三味線なんて聴くのも厭だというほうだったんです。ところが一九五六年に最初にオーケストラ曲を書いたとき、それが演奏されるプログラムノートに「この曲には終わりも始めもない。ただ偶然にそこに流れている音の一部を取り出してきたにすぎない」と書いている。僕自身はそういう実感で作曲をしいいたのです。そうしたら、始めも終わりもないというのは何だ、ヨーロッパの音楽で、始めも終わりもないというようなことを言うのは駄目だ、とずいぶん叩かれたものです。」

人はどこかで
それと知らず
遠音を聴き続けている
始めも終わりもないその音色

人はサワリをもって生まれる
カラダとココロというサワリ
あえて調和を避け
ひとりであることを深めながら

けれどサワリを抱えることで
ひとりであることを聴くことができる
そしてひとりであることで
ともにあることを聴くことができる

ひとりであること
ともにあること
その源が遠くから聴こえてくるのだ
始めも終わりもない調べとして

mediopos-739

2016.11.24

■マックス・デグマーク『数学的な宇宙／究極の实在の姿を求めて』（谷本真幸訳 講談社 2016.9）



「人類は「实在」の本当の姿について、太古からずっと疑問に思い、関連する深い問いについて探究を続けてきた。あらゆるものはどこから来たのか？ どのように終わるのか？ 实在する世界はどのくらい大きいのか？

これらの疑問は人の心を強く捕らえ、事実上、世界のすべての文化がそれにとり組んだ。そしてその答えを、手の込んだ天地創造の神話、伝説、教義などの形で、世代から世代へと伝えてきた。」

「大と小という正反対の方向に向けて始めた私たちの知的探究は、いずれも同じ場所にたどり着いた。数学的構造の世界だ。」

「最大と最小のスケールまで行くと、实在が数学的構造で織られていることが明白になる。しかしこの事実、私たち人間が通常認識している中間スケールでは見過ごされ易い。」

「究極の实在が本当に数学的だとすると、实在のすべての側面は原理的には理解可能であり、私たちの理解に限界を与えるのは、私たち自身の想像力だけということになる。」

究極の实在を問う
その問いに終わりはない
問うことそのものが实在となるからだ

实在が数学的構造をとるならば
その問いそのものが实在となる

数学はコトバの幾何学である
はじめにコトバがあった
コトバは神であった

コトバは問うた
究極の实在とは？
その問いが实在となる

光を問えば
光が实在となり
闇を問えば
闇が实在となる

世界の限界は
問いの限界である
世界の限界は
想像力の限界である

問うときに
世界は始まり
問えないとき
世界は終わる

mediopos-740

2016.11.25

■大橋良介『時はいつ美となるか』（中公新書 727 昭和 59 年 5 月）



「自然の四季を熟せしめ、花と果実とを育む「時」は緩やかである。同じように「美」として熟す「時」もまた緩やかである。「時はいつ美となるか」というその時熟の条件は、この「緩やかなる時」である。」

「緩やかなる時」とは、その内的構造に立ち入ってみれば、時を奪い時を与える生死の場である。時がいつ美となるかというその時熟の構造は、道元禅師のいう「わが尽力」そのものである。」

「美的時熟とは、時が自らに時を与える一つの仕方である。しかし、時は自らに一つの時を与えると同時に、一つの時を奪う。それは時の本質性格でもある。時は物を育てるとともに、物を滅ぼすからである。時が熟して一つの物が現前するとき、その物は必ず時に属する物として一つの影を持つ。それは本質的には、時の底を破る底なしの無ともいうべきものの影である。美的時熟が歴史世界の出来事となるのに伴って、この無の影も現れざるを得ない。美的時熟は本質的には時の肯定面の作用でありながら、他方での時の深淵の露呈である。時はいつ美となるか、という問いは、このような無に張り渡された時の内なる歴史世界の展開への問いである。」

美的時熟は自らの影もしくは無と切り離せない出来事だとすれば、美が救済の原理たり得るかという問いも、この無の問題と切り離しがたく結びつく。無は、時の内なる死すべき存在者にとっては、「死」という形で迫ってくる。」

「美的時熟の闇が作品を覆うとき、美は単に時熟しないというのではない。美は破れるのである。破れたあとに醜が残るのではない。醜とは、なおも美的時熟の一種である。闇はこの美的時熟そのものを呑み込むのである。美はここでは救済の原理としても沈んでいく。このとき芸術作品は何を目指し、何を表現するのであろうか。芸術それ自体が終焉を迎えるのであろうか。」

「不到ともに有時なり。到時未了なりといへども不到時来なり」と道元は言っている。「到」とは、われわれの言葉で言えば「時熟」である。「不到時」とは、時熟せざる時ということである。時熟せざる時とは、単に未熟な時ばかりを指すのではない。それは一切の時の現成の内において現成しない、本質的な意味での不到である。しかしこのような到らざる時が、到らざる時として到来している、と道元は言っている。それはわれわれの問題に引き戻して言うなら、美的時熟の無の影が、美的成熟の構造そのものに属するものとして、いわば裏返しの仕方では時熟しているということである。」

時の神は
双つの顔を持つ

時は与え
時はまた奪い
時は熟し
時はまた無へと歩む

そして時の神は
双つの後ろの正面から
永遠への境を超えてゆくだろう

美の神もまた
与え奪い
熟し無へと歩み
双つの後ろの正面から
永遠への境を超えてゆくだろう

生と死という
双つの顔の後ろの正面から
永遠への境を超えてゆくように

mediopos-741

2016.11.26

■長谷川權『和の思想／異質のものを共存させる力』（中公新書 2010 2009 年 6 月）



「あるとき、谷崎のように（谷崎だけではなく日本人の多くが今なおそう考えているのだが）和を固定的にとらえること自体が誤っているのではないか、和とは本来、そのように固定したものではなく、さまざまな異質のものを共存させる躍動的な力のことなのではないかと思いはじめた。

和をそのようなものとしてとらえなおすと、たちまちさまざまなことが結びあい、もつれていた何本もの糸がほとけていった。」

「和とは本来、さまざま異質なものを調和させる力のことである。なぜ、この和の力が日本という島国に生まれ、日本人の生活と文化における創造力の源となったか。これがこの本の主題である。

その理由には次の三つがある。まず、この国が緑の野山と青い海原のほか何もない、いわば空白の島国だったこと。次のこの島々に海を渡ってさまざまな人々と文化が渡来したこと。そして、この島国の夏は異様に蒸し暑く、人々は蒸し暑さを嫌い、涼しさを好む感覚を身につけていったこと。こうして、日本人は物と物、人と人、さらには神と神のあいだに間をとることを覚え、この間が異質のものを共存させる和の力を生み出していった。間とは余白であり、沈黙でもある。

この間を作り出すために切るという方法がとられる。布地を切り、空間を切り、野菜や魚を切るだけでなく、花を切り、思いを切り、言葉を切る。誰でも感じていることだろうが、この切るというしぐさが涼しさと結びついているのはこのためである。

和の力とはこの空白の島々に海を越えて次々に渡来する文化を喜んで迎え入れ（受容）、そのなかから暑苦しくないものを選び出し（選択）、さらに涼しいように作り変える（変容）という三つの働きのことである。和とはこの三つが合わさった運動体なのだ。

ところが、明治維新を迎え、近代化（西洋化）の時代がはじまると、和が本来、躍動的な力であったことは忘れられ、たとえば、和服、和室、和食などというように和を固定したものとしてとらえるようになる。

このような偏狭な和はしばしば弊害をもたらす。ひとつは日本人のよりどころである和を矮小なものにすることによって日本人を自信のない人々にしてしまうこと。もうひとつは和が偶像化され、神話となって狂信的なナショナリズムを生む土壌となること。相反するかにみえる、この二つは実は表裏の関係にある。いつの時代、どこの国でも、過剰なナショナリズムは人々の自信から生まれるのではなく、追いつめられた人々の不安や恐怖から生まれる。熱狂的なナショナリズムの仮面をかぎとると、そこには必ず自信を喪失した人々の不安な顔がある。」

和は神秘学の源
異質なものをむすぶ力
嫌いなものを容れる力

和は間を生む
間を生むためには
水平から垂直へ
観を変容させねばならない

水平は異質を排するが
垂直は次元を超えて結ぶからだ
水平は時に縛られるが
垂直は時の深みへ向かうからだ

偽装された和に注意深くあれ
偽装された和は名ばかりの排除する力
みずからの弱さを隠し狂信を生み
そこに調和を育む音色は聴かれない

mediopos-742

2016.11.27

■スティング：57th & 9th / ニューヨーク 9 番地 57 丁目 (A&M REcords UICA-1067 2016 年 11 月)



(「スティングによるセルフ・ライナー・ノーツ」の「One Fine Day」より)

「気候変動なんて、でっち上げ。世界経済やエネルギー関連企業の利益獲得を妨害しようという意図から考え出されたでっち上げ。そういった受け止め方が、正しいものであってくれたら。私は最近、そんなふうに祈るようになった！」

おそらく実際のところ、それは故意のでっち上げであり、たしかに地球の資源は限られたものではあるが、私たちは、このままの強欲で冒険的な生き方でなんとかやっていると。招来の世代や、彼らが受け継ぐ世界のことなど考えなければ。

しかし私は心から、強く、こう望んでいる。こういった流れに反対の声をあげる人たちこそが正しく、関連分野で研究をつづける科学者たちの説はまったくのでたらめなのだ。そしていつか私たちは、感謝の気持ちを抱く。ある晴れた日に！」

「楽道家達は言う

未来とは人が足を踏み入れたことのない場所だと

歴史は語る

人は同じ過ちを再び繰り返す運命にあると

その二つの間に立たされて、心を決められずにいる

どちらの側につくか選ばなければいけないのに

目覚めた時には、ボクはもっと賢くなっているはずさ

ある晴れた日に」

このままではダメだ
変わらなければならない
そう言うのはカンタンだ
自分はなにも変わらないままに

あなたがワルいのだ
変わらなければならない
そう批判するのはカンタンだ
自分はなにもワルくないのだから

ある晴れた日に気づく
変わらなければならない
自分が変わらなければならない
ほんとうに変わるのはむずかしいけれど

ある晴れた日に
世界がすこしだけ変わって見える
ほんの一步だけじぶんで歩けたことで
ある晴れた日の奇蹟のように

mediopos-743

2016.11.28

■ミシェル・セール『作家、学者、哲学者は世界を旅する』（叢書・人類学の転回 水声社 2016.10）



「若い頃、熱に浮かされるように決意したものだ。哲学者の人生は、困難だが欠かせない三つのもの、やり遂げるべき三つの旅から始まらねばならないと。深遠なる智慧に到達するまでには、少なくとも私が信じたところによれば、修行者は準備のために、まず世界を旅しなければならない。（…）」

次に修行者に必要なのは、知識の旅である。（…）」

さて、生涯の終わりになって今いちど、第三の幸福な運命が私にもたらされることになった。四つの群島を描き出しつつ、フィリップ・デスコラが近年、人類の文化を分類してみせたからである。かくして彼は、私の最後の情熱を救済した。——人間たちの旅を、私は思い描けるようになった。

ここに来てやっと、哲学者になる準備が整ったというわけだ。」

「世界像の一つ、アニミスト（Animiste）においては、あらゆる存在のうちに同一の魂が見出されるが、それらはめいめい独自の身体を纏っている。ナチュラリズム（Naturalisme）においては、逆にあらゆる身体（物体）が分子や原子といった同じ成分によって形づくられるが、内面性を備えた魂がただ人間たちだけを、各人によって違った風に、文化や社会ごとに多種多様に活気づけている。——第二のもの見方は、どちらかといえば近年の西洋を特徴づけるものだ。

もう一つ別のもの、トーテミスト（Totémiste）は、人間たちのあいだの相違を、動物や植物の種において示される相違によって理解し、しばしばある人間をある相物やある植物に照応させる。最後に、アナロジスト（Analogiste）の見るところでは、実在するものはすべて異っており、彼は無秩序で離散的なものの中に可能な関係を発見することに、精根を傾けている。

かくして世界旅行においては、物理的もしくは政治的な世界地図とは異なる地図が作成され、ある文化がある世界像に支配されているのに応じて、あらたに地図が分割されることになる。——海で区切られた五つの大陸に代わって、この分類は四つの群島を再構成する。そこでは地理的に遠く離れたものもろもの社会が、ふたたびグループを作り直すのである。

私はこの地図を、自分の文化をするために活用したのだ。」

「もろもろ関係（Relations）があるなら、その理由（Raison）がある。現実（Réel）が合理的な（rationel）ものであるなら、もろもろの関連（Rapports,Ratio）はそれをいっばいに満たし、それを基礎づけ、それを堅固にしている。ところで、あらゆるものが予測可能なものではない。偶然なもの（Contingent）が存在する。もし現実（Réel）が結びつけられた（relié）、関係的な（relationnel）、宗教的な（religieux）、おのであるなら、現実を貫いてあらゆる種類の結びつき（Laisons,re-ligeare）があり得る。より大きく、より曖昧で、あまり支配的でなく、不確定でもある第二の仮定は、より狭く、確定的で、厳密で、有効で、制御された、第一の仮定を含んでいる。三つの王国——合理的なもの、創発したもの、システムは、稀にしかない島々のように見える。——付着成長し、結びついた、無数のプリコラーージュたちが、それらを囲んでいるのだ。——カオス的な一つの海が、それらを満たして浸しているのである。」

物心ついたときぼくは思った
ぼくは世界を理解しなければならないと
世界の中において世界を理解しなければならないと

夢の中かどうかさだかではないが
世界の外へ帰ろうとするぼくに
世界の中でしかわからないのだ
さあ世界に戻るのだと論ず声を聞いた

旅ははじまった
アリアドネの糸を辿り
世界という迷宮の外に出るのではなく
秘密を解くための種を撒き
そこから伸びる糸を辿る旅

それは旅に出る前の
準備に過ぎなかったのかもしれない
物心というモノとココロの種が
互いの源と交叉しむすびあうための
光と水と風を受ける準備

ともあれ旅ははじまった
カオスのなかにコスモスを見出し
コスモスのなかにカオスを見出し
アルファとオメガが錯綜する旅

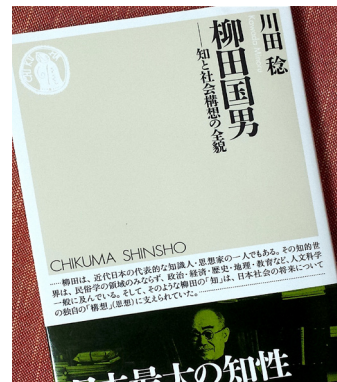
世界の中にあることで
世界の外をも旅している
そう思えるようになった
そして世界の外では
世界はモノココロを顕せないとさえ

旅は終わらないだろう
カオスとコスモスの源を見つけるまで
アルファとオメガの永遠を見つけるまで
そして世界の理由をみずから顕せるまで

mediopos-744

2016.11.29

■川田稔『柳田国男／知と社会構想の全貌』（ちくま新書 2016.11）



「おそらく柳田は、相対的に短いスパンでは、日本人のもっている氏神信仰や倫理意識などの遺産を持続させていかなければならないと考えていた。またそうせざるをえないとのスタンスだった。

だがより長いタイムスパンをとった場合、そのような信仰や倫理意識を人々が持ち続けていくことができるとは考えていなかったのではないと思われる。

では将来この信仰が消え去ったあとの日本人にとって、倫理的なものの内面的形成の根拠はいかなるものとしてありうるのか。

その点についてや柳田は黙して語っていない。おそらく現在の段階ではその点について語ることは不可能だと考えていたのであろう。

相当長いスパンで将来を見通したとき、今後のさらなる近代化＝西欧化の進展のなかでこれまでのものは消え去っていくであろう。そのときに改めてまた世界の意味や生の意味の問題が、新しい時代の倫理的なものの根拠がいかにして可能なかが、問われることになる。」

「先日、新聞紙上である高名な識者が、信仰の重要性とその公教育による教化の必要を説いていた。

だが、柳田の観点からすれば、宗教的信仰そのものは、すぐれて内面的なものであり、公的な教育や外部からの教室によって形成されるものではない。また、非宗教化世俗化は二〇世紀的な高度産業社会では形成されるものではない。また、非宗教化世俗化は二〇世紀的な高度産業社会では不可逆的に進展していかざるをえないものだった。その点は、ウェーバーやデュルケムなどと同様にみている。

この見方からすれば、いかなる意味での「神の国」の再興もまた、現代社会においては良くも悪くも不可能なことになる。ある意味では、そこに問題の深刻さがあるといえよう。

柳田は、内面的な宗教意識が社会的にいったん消失したのちには、宗教的な方向で内面的な倫理意識を人々のあいだに再構築していくことは不可能だと見ていた。それは、人々や社会のきわめて意識的な営為によるほかないと考えていた。そして、それには、おそらく日本のみならず広く世界史的視野からの見方が必要になるのだろう。」

「ほんとうにそれらの子供たちのことを考えようとするれば、彼らがおかれている社会や文化を、より良くしていくことを考えなければならぬ。そしてその社会や文化は、まさに他者や自然によって構成されているわけである。それゆえ当然、他者や自然との共生ということを意識的に考えていかなければならぬ。そこにはやはり将来の倫理形成へのひとつの糸口があるのではないか。そう柳田は考えていたのではないだろうか。」

新たな倫理は外からは生まれない
教えられたものは借り物でしかない

倫理はおのずから
しからしむるように
自己組織化されるように
生まれ出なければならない

宗教は仰がねばならないが
新たな神秘学は
みずからの内なる自由を
みずからを超えたものとして
ともに生きることになる

作られた教説は自動人形しか作れない
教えられた道徳は狂信しか生まない

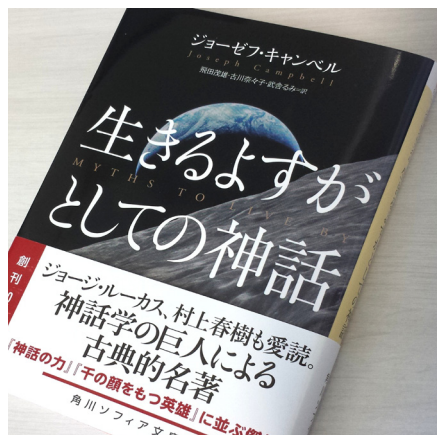
世は未知へ向かって
旅立とうとしている
それまで閉ざされていた叡智に向かって

叡智から身を閉ざすものは
今の破壊を避けようと
過去へと回帰していくしかないだろう
けれどもそれは砂上の楼閣のように
ただ虚しく崩れていくしかないのだ

mediopos-745

2016.11.30

■ジョーゼフ・キャンベル『生きるよすがとしての神話』（角川文庫 2016.11）



「要するに神話とは、いや、神話と宗教とは、偉大なる詩です。そのように認識することができれば、それらは事物を超えて、あらゆるところに散らばっている「聖なる存在」や「永遠性」を当然のように指し示すのです。そして、そのような「永遠性」は各個人のなかで完全なる全体として存在しています。すべての神話や偉大な詩、すべての神秘的な伝統は、このような態度を持っているという点で同じものなのです。そして、こんなふうにはインスピレーションを与えてくれるヴィジョンがまだ効果的に生きている文明においては、すべてのもの、すべての生き物は、その範囲内でいきいきと活動しています。」

「新しい神話とは、昔から語り継がれてきた、永遠性のある、不朽の神話を、それ自体の＜主観的な意味＞詩的に再生したものです。それは記憶に残っている過去のことや、予想される未来のことではなく、現在のことを詩的に語ったものでなければなりません。このことは、私たち人類が地球に存在する限り変わらないでしょう。新しい神話は、ある特定の「民族」のちょうちん持ちをするために書かれたものではなく、人々を目覚めさせる神話です。人間がただ（この美しい地球上で）領域を争っているエゴどもではなく、みなが等しく「自在な心」の中心なのだと思わせる神話です。そのような自覚に目覚めるとき、各人はそれぞれ独自のやり方で万人や万物と一体となり、すべての境界は消失するでしょう。」

古い神話を
古い容れ物に
閉じ込めてはならない
熟成された神話が
生きたポエジーとなるように
そして神話そのものもまた
新たに再生され得るように

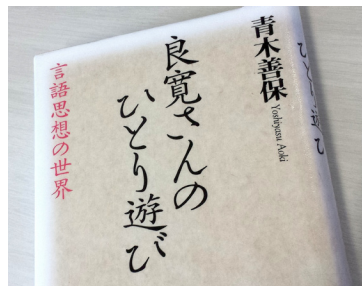
新しい神話は
境界をなくした
新しい容れ物に
容れなければならない
新しい神話こそが
生きたポエジーを詠うから

新しい神話には
自在な歌があるだろう
歌はなべての成長を誘うだろう
天にも地にもみずからの内なる星は輝き
世はあまねく光へと向かうだろう

mediopos-746

2016.12.1

■青木善保『良寛さんのひとり遊び／言語思想の世界』（文芸社 2011.7）



心のままに とはいへども
心は なんに従はん

心おしえる 心あり
心まどわす 心あり

されど いにしへ 過ぎ去りて
いまは心よ われに従へ

世にまじらぬとには あらねども
ひとり遊びて しばし過ごさん

「仏道に、「正道を遊ぶ」「陰道を遊ぶ」の言葉があります。「道を歩む」の意味です。

「遊び」は、日常性に対して、自由で・非生産的で・目的を持たないとか、あるいは、俗・日常性に対して、聖なる行為に類似しているとも言われています。

「遊」のつくりの「辵」は、「精霊のやどる旗竿をもつ人の形」を表している。この解字は、精霊の幡を担う人が、()は陸路、「辵」は海路をゆく様子を思い浮かべます。

古代的に考えると、自我の意識を超えて、天の意思に従って行動することを「遊び」と解釈できます。

世の中に まじらぬとには あらねども
ひとり遊びぞ 我は勝れる 良寛

この歌は、行灯の下で読書する良寛さんを描いた画の賛です。年老いた良寛さんが楽しんで読書するとしていますが、「ひとり遊び」は、良寛さんの学問する姿を秘めていると考えたいのです。

良寛さんの読書は、個人的な世界を脱して天の意思による行為ではないでしょうか。

たとえば、江戸国学者大村光枝の『斉明紀童謡考』を書き写し、朱筆を容れて難解な童謡考を読みとこうと苦闘します。また、本居宣長『漢字三音考』を求めた書簡から当時注目された専門書に通じていたことがわかります。幼友達の維繫尼あての書簡で貴重な『万葉集略解』（三十巻）の借用を依頼しています。

必死に探して専門書を、精読・調べ読み・批判読みなどする、真理を求めて学問する、勉学する姿を映していると思います。

良寛さんの言語探求は、五十音図の作成、万葉仮名の常用、枕詞の多用によって、言語の技術的な側面ではなく、純粹言語としてのやまとことばの源泉を求めているようにみえます。当時流行した神代文字にも関心を寄せています。殊に江戸後期の漢詩や歌の言語表現に対して強い違和感を持っています。

「言語は心を技術によって表すのではない、心と言語の分離を否定し、心そのものがやまとことばであるとする、言語と精神の一体の言の葉を追求したのではないかと推察しています。」

*良寛：いにしへは 心のまゝに 従へど いまは心よ われに従へ

mediopos-747

2016.12.2

■外郎まちこ『ういらう／東洋神秘思想と共に二千年』（東京書籍出版 2016.10）



「ういらう」（旧かな遣いでは「ういらう」と聞くと誰でも一度くらいは聞いたことがあるくらい、よく知られた菓子の名前です。しかし、それが元々は名字であったことを知る人は少ないのではないかと思います。私はその外郎家に生まれました。先祖が初めて菓子を作ったのは室町時代ですから、五百数十年後の子孫ということになります。菓子の「ういらう」は勿論その時から現代まで伝えてきていますが、実はそればかりではなく、外郎家はそれよりも遙か昔の、神話の時代に仙人が造ったという薬を大切に守り伝えてきた家でもありました。しかしそれらの仙薬は、暫く前に大きな転換期を迎えました。」

「戦後十年以上経っていたのではないかと、思うが、ある時、父と番頭さんは突然厚生省に呼ばれた、という。驚いて駆けつけると、厚生省の薬事担当官から、医薬品の再評価に関する法律が出来たことを知らされたそう。

「薬のういらう」は数百年も前の薬である。いや実際は二千年近く前の薬であるが、そのことは口伝なので当時の厚生省の人は知らなかったはずだ。いずれにせよ、その構成生薬には、現在では薬として使用しないものや、単独では副作用の心配がある生薬が含まれている。そういう物を含有している薬は再評価では通らない。使ってはならない材料を使っているとして、製造禁止になってしまう。続ける積もりなら、処方変更しなければならぬ、という話だったそうである。

その時に、父は思いがけないことを聞いたという。既に亡くなられている、林大将という人が、厚生省の人達に、数ある伝統薬の中で、「薬のういらう」だけは、どうしてもそのままの処方でも永く存続させて欲しい、と遺言を残されて逝かれた、と教えてもらったそう。後から、私は、もしかしたら、戦時中、薬を特例で作り続けられるようにして下さった厚生大臣が林大将ではなかったか、と思い、調べてみたが、これも資料は見つからなかった。(…)

いずれにしても、その時の厚生省の方々は、林大将の遺言に応えたいと、真剣に考えて下さったそうである。(…)

後、他に残された道は、臨床試験を通して、単独で副作用がある材料を使っても製薬して「薬」になれば問題ないことを証明しなければならぬ。しかし、その費用は何億円もかかる。(…)

その上に、困ったことには、薬局製剤になると、既に製薬を行っている工場を閉めなければならない。ところが、原料生薬を扱う都合により、調剤室のような狭く閉じられた場所では製薬は不可能だった。工場や、同じように広い空間で製薬できないときは、薬はもう造れない。これには、担当官も困ったのではないと思う、それでも諦めることなく、懸命に打開策を考えて下さったそう。

そこまで心配して頂けることを感謝した父の決意を受けて、厚生省の方々は最後まで丁寧に配慮してくださったそうである。当時、薬局製剤の許可は都道府県知事が与えるものだったが、特例として、その時の厚生大臣が許可を与えてくださった。」

「今、病に苦しんでいる方々、いや生きることに苦しんでいる方々が、ご自分の内なる神の存在を知り、脳で考えた心の探究と、この次元に生まれてきた魂の願いとが、身体を違う方向に引っ張ってはいないか、自分に嘘をついていないか、ご自分の心の中を見つめ直し、魂の声に耳を傾けることによって、本当の意味で、この世の幸せを手に入れて頂きたい、と、心より願う（勝手なお願いだが）。

「この世で幸せを得ること、それこそが二千年前、これらの仙薬がこの世に誕生する時に「籠められた祈り」なのだから。」

実験室で作れないものは
認められないのだとすれば
やがて人もまた
実験室で生まれ育たないときには
人として認められなくなるかもしれない

だれにでも同じように効く薬があるとすれば
同じ体と心を持っているときだろう
実験室で規格通りにつくられた体と心
心はすでに体に還元されているかもしれないけれど

古いものは古いというだけで
価値があるわけではない
新しいものが新しいというだけで
価値があるわけではないように

価値を決めるのはだれだろう
法で決めればそれが価値なのだろうか
だれにでもわかることが価値ならば
わからないものは許されないということだ
言葉もだれにでもわかることばだけが認められる
けれどそのわかりやすさほど怖いものはない

その反動で専門家は専門用語で何重にも防護する
ギネス記録にこだわるのも同じことだ
ひとりだけにしかできなかったことが崇拜される
だれにでもわかる価値でなければならないけれど

そこではだれにでも分かるという価値と
経験するという深みが分裂してしまう
そしてねじれた祈りとともに
宗教と科学という宗教がカルト化してゆく

mediopos-748

2016.12.3

■福田尚代『ひかり埃のきみ／美術と回文』（平凡社 2016.11）



「大学で美術を学びはじめたある日のこと、描いていた細かな点のひとつひとつが、突然文字となって追ってきた。まるで点の集積を顕微鏡で拡大していたら、ある倍率に達した瞬間にいっせいに文字としての正体を現し、目に飛び込んできたかのような出来事だった。点とは言葉だったのだ。」

「時間に洗われた事物が、最小の粒子となり偏在している。からだが魂の器であると同時に、本も手紙も、それらが燃やされて生じた灰も煙も、言葉の片鱗を宿している。そもそも言葉こそが魂の器、つまり景色や音を運ぶ舟であり、森羅万象の無数の塵芥だった。」

「美術とは物質を根幹まで突き詰めることであり、物質の極みとは言葉の粒子であった。言葉を消すことは非在する言葉を書くことにほかならず、言葉はくりかえし闇となり光となる。時間全体が混ぜあわされて、鈴の音になり全方向へとふりそそぐ。生まれてすぐに見たものは水滴にみちた世界であり、帰還の前に予感するのは、虚をみたく無限の明滅だった。」

「時の軌道を描いた文字の痕跡

千古の詩も大河を遡う

時の帰還

ときのきとうをかいいたものこのんせき

せんこのしもたいかをおう

ときのきと」

「何かを生み出すことは碎かれることと地続きなのかもしれない。綴った言葉をひとつも踏みはずさずに遡行して帰らなければならないしくみの陰しきは、身も心もばらばらにしかねないものであり、だからこそ個人の思感では書くことのできない、予測不可能な言葉の配列を生む力をはらんでいる。だが何より予測不可能な事象もまた、いきなり訪れる喪失ではないか。《はじまりからも終わりからも読むことのできる言葉》とは、彼岸に向かわざるを得ないものなのだろうか。ひとつ誤れば、書きあがった途端に凍結されて閉じ込められるかもしれない。それでもありえないほど粉々になることができれば、境界線の中にしみ込んでゆけるかもしれない。幼年時代、喪失と愛は同じ地平にあったではないか。あらゆる言葉の水源は涙ではないか。ふと、水平線が無数に交差する、均質な青い方眼紙に目にとまる。《はじまりからも終わりからも読むことのできる言葉》をいっそう細かく、最小単位の四角の中に、塵のごとく書き込んでゆく。小さすぎて自分でも読めないまま、指先の感触だけで書いている。誰にも読むことができない。書くことが消すことに追いついてゆく。」

世界は弦と微粒子でできている
そしてそれらはコトバなのだ

人は独自の関数存在だ
コトバが代入されたとき
人はそれぞれの音楽を奏ではじめる

弦をふるわせるのをやめたとき
人はみずからの虚無の前で立ち竦み
時のなかでかつ消えかつ結ぶように
無と存在が明滅するのを見る

無と存在を往還するように
コトバを往還させ弦を奏でよ！
往きの道を裏返しに還りゆくのだ
無限は光と闇のコトバを明滅させる
アルファからオメガへ
オメガからアルファへ

mediopos-749

2016.12.4

■高橋順子『水のなまえ』（白水社 2014.5）



（「恋する川」より）

『万葉集』には、恋する自分の心の動きが川のありようと同じであるとする歌が何首か収められている。なぜ万葉びとは川の水に、自らの恋を投影していったのだろうか。

古代の人びとは自然のあらゆる事物に神のみわざを認めた。海神、渡りの神、山神、河の神、道の神、坂の神、田の神など……………八百万の井網が身がうようよしていらっしやう。自然が荒れ狂ったときは、神が怒って罰を下されていると恐れた。」

「歌を神々に奉ることは、魂を手向けることだった。それは言霊のもつ呪力に負うものだが、祈りといってよいだろう。

川の水が絶えず流れているように、変わらぬ愛を誓うという趣旨の歌が、『万葉集』にいくつも載せられている。天変地異によって川の流れが滞ったなら（そんなはずがないのだが）、恋は全うしないだろう、というのも同じ趣旨の反語的表現である。お気に入りの定型的な表現となっているようだ。『万葉集』の歌で私が感動するのは、恋の駆け引きなどのような遊戯的で装飾的なところはいっさいなしに、ひたすらにわが恋を見つめ、恋人を見つめているところである。

泊瀬川流る水沫の絶えばこそ我が思ふ心遂げじと思はめ
三輪山の山下とよみ行く水の水脈し絶えずは後も我が妻
わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ我が恋止やめ

（・・・）

万葉びとたちは、自らの恋を川に寄せてうたったときから、言霊の力により、まさしく川のような、美しい一筋の恋心を得たのではないかと私は思っている。」

ひたすらに
川は流れ流れ
ひたすらに
心は流れ流れ
ひたすらに
祈り祈りて
澱まぬように
荒まぬように
我が恋の絶えず
流れ続けんことを

mediopos-750

2016.12.5

■ルイーザ・ギルダー『宇宙は「もつれ」でできている』（講談社ブルーバックス 2016.10）



「二つの実体が互いに作用すると、必ず「もつれ」が生じる。光子（光の小さな破片）や原子（物質の小さな破片）であっても、原子からなるもっと大きな塵埃や顕微鏡、あるいはネコやヒトのような命あるものであっても同様だ。のちに何か別の何かと相互作用しなかがりーネコやヒトにはそれができないためにその影響に気づかないがーどれほど互いに遠く離れていても、もつれは持続する。

このもつれこそが、原子を構成する粒子の動きを支配している。まず、互いに作用しあうと、粒子は単独としての存在を失う。どれほど遠く離れても、片方に力が増えられ、測定され、観測されると、もう片方は即座に反応するらしい。両者の間に地球がすっぽり入るほどの距離があったとしても、だ。だが、そのしくみは未解明だ。」

「もつれの存在（特に水素分子内部など、ミクロの距離の場合）が明らかになりはじめたのは20世紀初頭、初期量子論の時代である。しかし、この大きな矛盾を単純な代数と深い思考で世に示したのはベルであった。

量子力学上のこの謎に対して、その創始者たちの反応は大きく4つに分かれた。ボーア、ハイゼンベルク、パウリの三人は正統派解釈の立場を取った。のちに「コペンハーゲン解釈」とよばれるものである。それに対し、アインシュタインら三人の物理学者はいわば異端派で、自分たちがその発展に大きく貢献した量子力学は「何かがおかしい」と考えていた。懐疑派は実際主義的な考えに立ち、謎の解明は時期尚早と主張した。最後に、量子力学が突きつける謎に困惑して単純化しすぎた説明で片づけたものもいた。

魚に水が必要なように、理論も解釈を必要とする。もつれに対する解釈をめぐるさまざまな反応が巻き起こり、量子力学のその後に甚大な影響を及ぼした。この事実一つをとっても、「もつれの時代」が過去の科学史とは大きく断絶していることがわかる。従来の古典的な（量子論以前の）数式は、用語が定義されれば本質的に説明を要しなかった。ところが、量子論革命が起こると数式は沈黙してしまい、解釈があってはじめて数式は自然界について語るようになったのである。」

「実際の物理学は、人間による果てしない探究の過程である。頭だけの預言者の前に神や天使が完成された理論をもって現れ、それをすぐさま預言者が教科書に書き上げるわけではない。教科書的な単純化は、一つひとつのアイデアから過去にも未来にも伸びている奇妙にねじれた、しかし魅力的な道筋をあいまいにしてしまう。普遍化と完璧さを追い求める一方で、あたかもすでに到達したかのように書いたのでは、嘘になってしまう。」

「20世紀の量子物理学者の回想録や伝記を読み始めると、私は映画を観ているような気分になった。登場人物は生き生きと動き、ひねりのきいた筋書きはまったく予測がつかない。科学の強みというのは、歴史の偶然性を取り除き、純粋な知識に到達することができるということである。その一方で、この知識というものは、特定の時代の特定の場所で、特定の情熱をもって生きる人々によって、パズルのピースをはめるように一つずつ構築されているのだ。状況次第で、科学はある方向ではなく別の方向に展開していく。往々にして、癖のある人物の登場（それは決して肉体から離れた脳ではない）や予想外の出来事（真実を求めるわき目もふらない前進ではない）によって、それが決定的となる。」

どんなに遠く離れていても
わたしはあなたと繋がっている
宇宙がもつれでできているように

恋をすることは求めること
求めるだけでほんとは与えられている
失恋はただの記憶喪失にすぎない
どんなに失っても失うことはできないのだ

どんなに隠そうとしても
秘密を隠すことはできない
隠したと思いきこむことはできるけれど
ほんとはすでに知っている
秘密を知るといふ快樂のために

宇宙に謎はないのかもしれない
存在に謎はないのかもしれない
ただそれを解く楽しみのために
コトバ遊びをしているだけなのかもしれないのだ